

学術俯瞰講義 学問と当事者性1

上野千鶴子(社会学)

東京大学大学院人文社会系研究科

Ueno@l.u-tokyo.ac.jp

学問とは何か

- ◆ 誰のための、何のための、学問か？
- ◆ 「真理のため」？ → NO
- ◆ 誰のための、どんな「真理」か？
- ◆ 「真理」はひとつか？
- ◆ 「真理」は不変か？

真理とは何か？

- ◆ 客観性基準(第3者基準)
- ◆ 論理性基準(論理的整合性)
- ◆ 検証可能性基準

完全に論理整合的で客観的、かつ検証可能な「天動説」？

天動説→地動説→相対性理論

(説明原理の経済＝オッカムの剃刀)

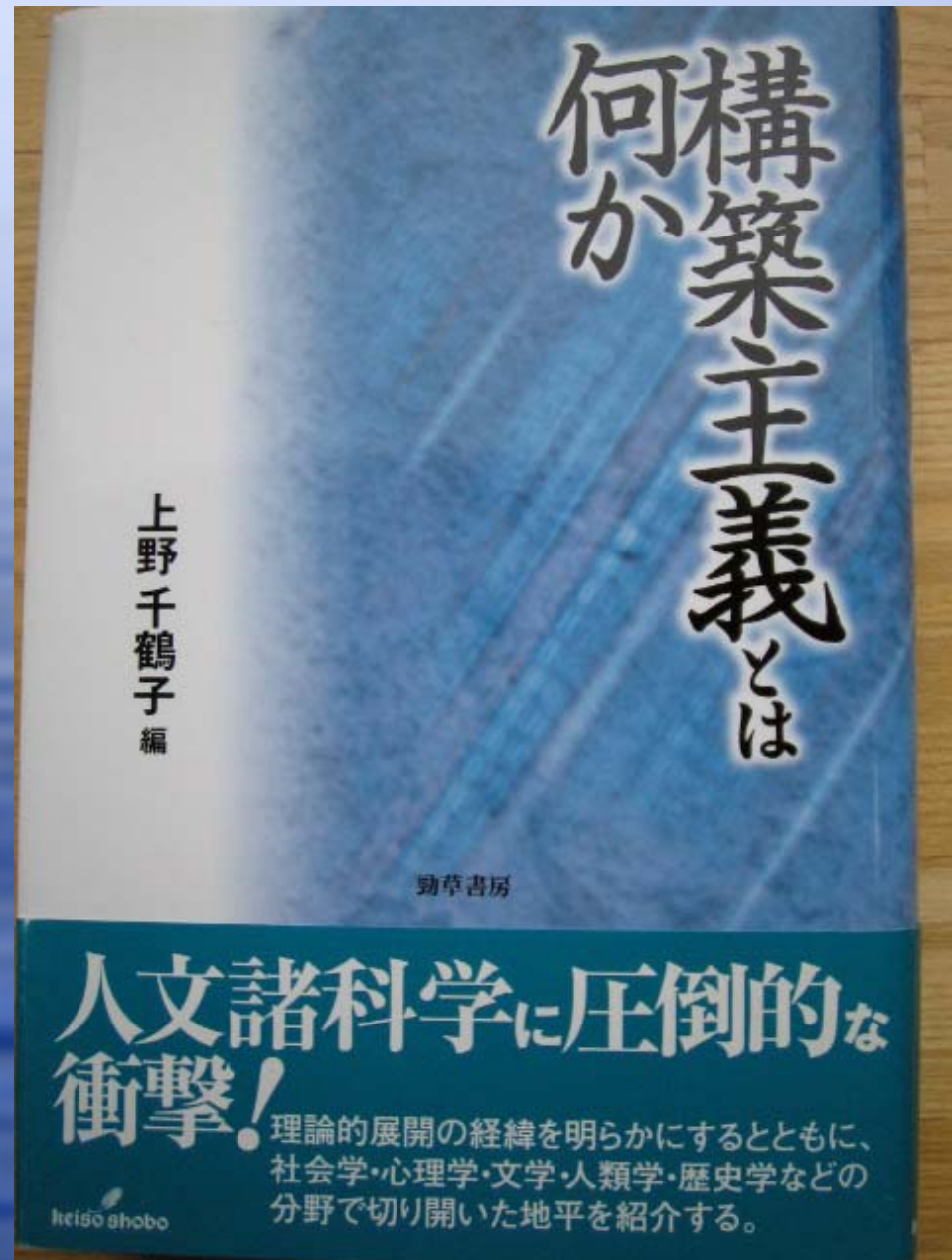
科学の自己言及性

- ◆ 世界の「外」に出ることはできない
- ◆ 社会科学の自己言及性／自己再帰性
Self-referenciality, self-reflexivity

パラダイム・シフト

- ◆ Thomas Kuhn『科学革命の構造』
[1962=1971]
- ◆ 「真理」= 科学者集団の相互(間)主観的
合意
- ◆ 社会科学はそれ以前

上野千鶴子編
『構築主義とは何か』勁草書房
2001



社会科学の自己言及性

- ◆ 社会科学のオールド「自然科学」モデル
- ◆ 社会(システム)の調和モデルと葛藤モデル
Harmony model vs Conflict model
- ◆ 機能主義システム論の保守性
順機能eufunctional／逆機能dysfunctional
- ◆ 「客観性」「中立性」の神話
(第三者基準＋利害関心からの中立)

社会構成(構築)主義 social constructionism

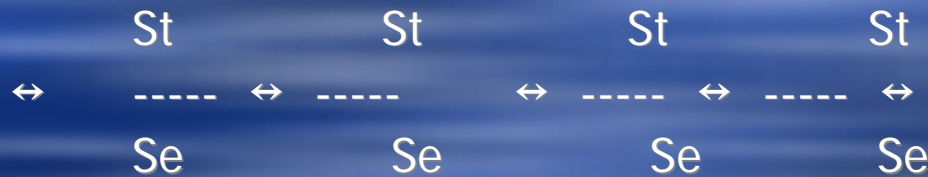
- ◆ 「言語論的転回linguistic turn」[Burr 1995]
 - ◆ ポスト構造主義
 - ◆ 社会構成主義の3つの前提
 - (1)現実社会的(間主観的)に構成される
 - (2)現実言語によって構成される
 - (3)言語は社会的な構築物である
- 「現実」の多元性・可変性
- 「人は言語の外に出ることはできない」
Wittgenstein

社会構築主義の特徴

- ◆ 反-本質主義 anti-essentialism
 - ◆ 反-実在論 「実体の形而上学」 Butler
 - ◆ 文化相対主義
 - ◆ 言語(言説)による知の組織化
 - ◆ 言説遂行性 言語行為論 Austin, Searl
- 遂行的言語行為 performative speech act
の反復による沈殿の効果としての社会的
現実／慣習的行為

構造主義言語学とは何か？

- ◆ 記号Signeの意味作用=
能記Signifiant／所記Signifieの対応
- ◆ 記号の意味／価値=示差的価値distinctive
feature
- ◆ 記号と記号言及物referentとの非関与／恣意性



Language=langue+ Σ parole Saussure
(system=rule + Σ practice)

構築主義は言語決定論か？

- ◆ 構造主義＝構造決定論 Saussure, Levi-Strauss, Lacan
- ◆ ポスト構造主義＝非決定論 Derrida

言語＝貨幣（記号）

ただ流通することによってのみ価値が発生する

知とは何か？

- ◆ 「真理を定義する権力」Foucault

- ◆ 知の組織化の水準

語<言説<物語<イデオロギー

Word<discourse<narrative<ideology

- ◆ 言説分析discourse analysis

Qなぜ言表ennoceのうちにあるものは組織的にあらわれ、あるものはあらわれないのか？ 知の考古学／系譜学

[Foucault, 1976=1986]

知の生産／流通／消費

- ◆ 知の再生産の制度=アカデミア
- ◆ 制度化された知institutionalization
- ◆ 知識社会学から文化の社会学へ
 - ①生産と再生産
 - ②流通とメディアtechnology/capitalism
 - ③能動的な消費者audience

知の制度的再生産

- ◆ 誰がentitlement
(研究主体への資格付与)
- ◆ 何をresearch subject
(研究主題の適切さagenda setting)
- ◆ いかにresearch method
(客観性・中立性)
→「客観・中立」の神話？

ウェーバーの「価値自由」 Wertfreiheit

Max Weber 1972『社会学・経済学の「価値自由」の意味』

- a) 純粹に論理的になされうる純粹に經驗的な事態を、実践的・倫理的なまたは世界觀的な評價から區別することは正当だが、それにもかかわらず、まさにそれゆえに、この2つのカテゴリーの問題はアカデミックな問題である
- b) この2つのカテゴリーの問題の分離は、論理的に首尾一貫して遂行することができないとしても、それでもすべての実践的な価値問題を講壇においてはできるだけさしひかえることがのぞましい

→b)の立場はわたしにはうけいれることができない

ウェーバーの「価値自由」の意味

a)の立場はただつぎのばあいにものみ、うけいれることができるようにおもわれる。すなわち大学の教師が、かれがそのときどきにのべることのうち、なにが純粹論理的に解明されたものまたは純粹に經驗的な事実確定であるかということと、そしてなにが実践的評価であるかということとを、かれの聴講者たちに、そしてじぶんじしんに、きびしくあきらかにするという義務を無条件に課するならば、このばあいにものみ、うけいれることができる。[Weber1951:490-1=1972:20-22]

=知的誠実さ

構築主義の社会学

- ◆ 「社会問題」とは何か？ [Specter & Kitsuse 1977=1990, 中河1990]
- ◆ 「問題」と「実態」の非関与
- ◆ 「クレーム申し立て」活動の効果
- ◆ 「児童虐待」「DV」

「社会問題研究を社会の特定の状態についての研究から、クレーム申し立て活動によって社会問題を構築する人々の相互行為に関する研究へと転換した」[赤川2006]

社会的現実の多元モデル

- ◆ 「視点」「利害／関心」が「問題」をつくる
- ◆ 異なる複数の利害集団
- ◆ 多数派の「現実」と少数派の「現実」
(支配的現実と対抗現実の非対称性)
- ◆ クレームの顕在化と抑制[草柳1996]
- ◆ 権力＝「現実を定義する能力」Shutz

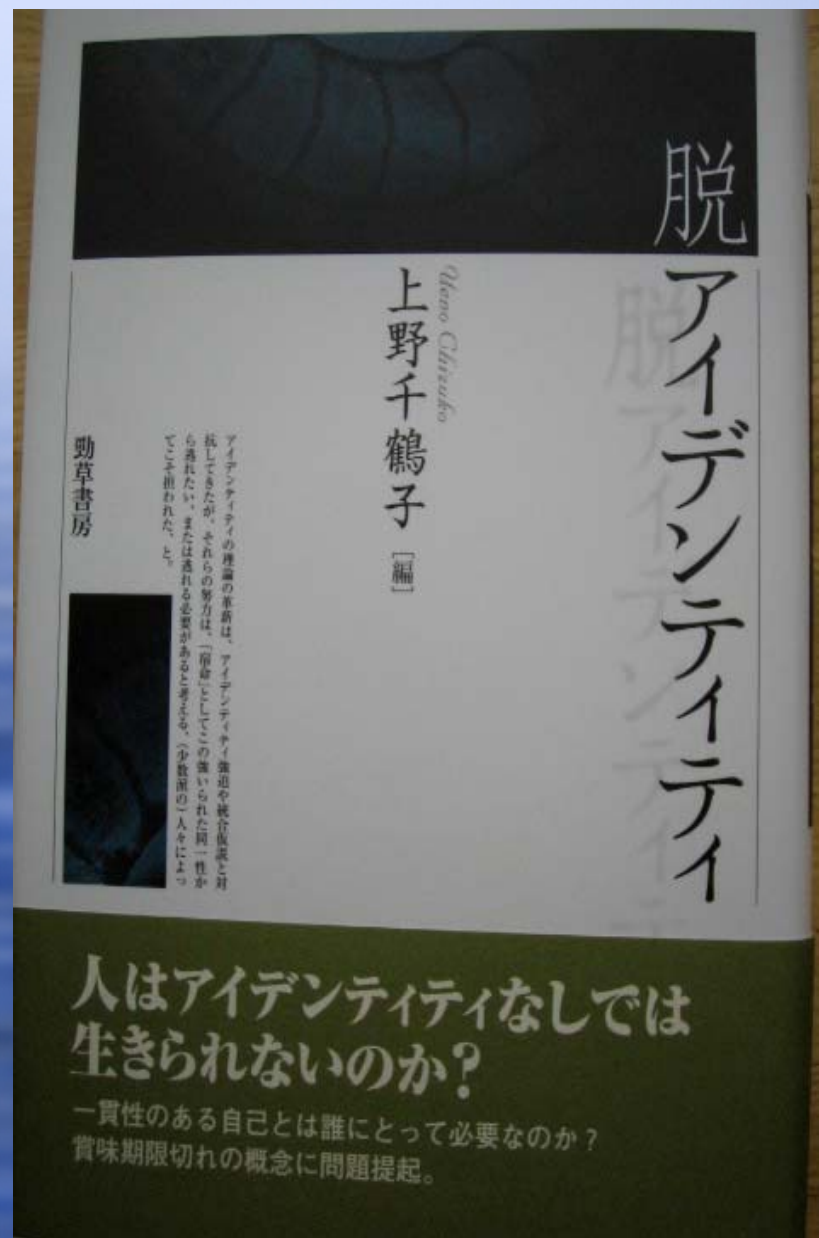
社会運動とクレイム申し立て

- ◆ 資源動員論
- ◆ Framing contest, Gamson
Ex.「原発は危険だ」vs「原発は安全だ」
- ◆ 利用可能な言説資源(有限個)
- ◆ 象徴闘争

社会的少数者の自己定義

- ◆ 支配的集団による「他者」化
「...でない者」としての優位集団の自己定義
Ex.白人、男性、高齢者[Morrison 1990=1994]
言語学的特徴=欠性対立privative opposition
marked vs unmarked
Ex.非行少年vs(善行少年?)
- ◆ 支配的集団が定義する「他者」カテゴリーへの同一化identification
- ◆ 同一性の獲得=「他者になる」こと=自己疎外
Ex.同性愛者[古川1993]

上野千鶴子編
『脱アイデンティ
ティ』勁草書房
2005



3つの応用問題

- ◆ ジェンダー研究
 - ◆ ポストコロニアリズム
 - ◆ 当事者研究(障害学、患者学、不登校学、向老学、女性学等)
- ←理論(という分析ツール)はその必要のある担い手によってつくられる

上野千鶴子

umiko.chihara

差異の

政治学



フェミニズムは
何を変えたのか



最新の研究成果を盛り込んだ待望の書

岩波書店 定価(本体2500円+税)

上野千鶴子
『差異の政治学』
岩波書店2002

「ジェンダー」概念の登場

- ◆ 「ジェンダー」
新しい概念は新しい現実を表象するために要請される
- ◆ Sex ≠ Gender
- ◆ Sex ≠ Sexuality

生物学的カテゴリーとしてのセックス

- ◆ 遺伝子、性染色体
 - ◆ 性腺、内分泌
 - ◆ 内性器
 - ◆ 外性器
 - ◆ 脳
 - ◆ 第二性徴
- 連続性・蓋然性・不一致

社会的文化的カテゴリーとしての ジェンダー

- ◆ 出生児の性別分類
 - ◆ 性別自認gender identity
 - ◆ 性別心理／行動femininity/masculinity
 - ◆ 性別役割gender role
 - ◆ 性別秩序gender order
 - ◆ ジェンダー体制gender regime
- 性別二元制
- 「第3の性」(=女性化された男性)

言語的カテゴリーとしてのジェンダー

言語論的転回linguistic turn以降のジェンダー概念

- ◆ 言語記号と記号対象物との非関与
- ◆ 排他的二元論的構成(中間項の排除)
- ◆ 非対称的差異化 欠性対立(有標／無標)
- ◆ 言説実践によるカテゴリーの再生産

Cf. Language=languge+ Σ parole Saussure
system= rule + Σ practice

ポスト構造主義のジェンダー概念 I

- ◆ 「身体的差異に意味を付与する知」 Joan Scott
- ◆ 「非対称的差異化実践」Christine Delphy
→ 二項から非対称的差異化カテゴリーへ
動詞gendering／形容詞genderedとしての用法へ

ポスト構造主義のジェンダー概念 II

- ◆ 「セックスはジェンダーだ」Judith Butler
(=セックスはジェンダーという言葉的認知カテゴリーを介してのみ認識される)
- ◆ 差異化実践の反復的遂行の効果としての沈殿物＝同一性identity（結果であり、原因ではない）

ポスト構造主義の心理学的カテゴリーとしての ジェンダー(アイデンティティ)

- ◆ 異性愛秩序のもとでの性的二元制への排他的同一化
(Freud-Lacan派心理学における性的主体化)
- ◆ 男＝父に同一化した者／女＝母に同一化した者
- ◆ リビドーカセクシス(持ちたい欲望)と同一化(なりたい欲望)の対象を性的に分離した者＝性的成熟
- ◆ その混同は性的異常・逸脱＝病理化
- ◆ 父／母は人格でなく社会制度(役割)＝位置的同一化
Paul Mitscherlich

女性学women's studiesの誕生

- ◆ 学際研究の一領域Interdisciplinary studies of women

- ◆ 日本産「女性学」の定義 井上輝子[1980]

「女の、女による、女のための学問」

Of women, by women, for women

Cf. democracyの定義by Lincoln

Q男に女性学は可能か？

(白人に黒人研究black studiesは可能か？)

男性による女性論

- ◆ 女性の対象化／客体化
Male studies on women
- ◆ 19世紀の性差論 Otto Weininger
- ◆ 男女異権論vs男女同権論
- ◆ 「女性性」の神格化 Georg Simmel
→ 聖女か娼婦か？

性の二重基準

sexual double standard

妻・母・娘 vs 娼婦

純潔・貞節 vs 淫乱・卑猥

生殖用の女性 vs 快楽用の女性

一人の男に所属 vs すべての男に所属

地女 vs 遊女

聖女 vs 売女

一夫一婦制 vs 売買春

→ 男性による女性のセクシュアリティの管理

アリストテレスの女性論

「本来的に支配するものと、支配されるものが存在することは一般原則である。支配の一つの形には自由民の奴隷に対する支配があり、また別の形には男性の女性に対する支配がある。奴隷にはまったく思慮というものが無い。これに対して女性は、思慮はあるにはあるが定着しないままである。」

ショーペンハウエルの女性論

「女というものはあらゆる点で愚かしく、理性と真の道徳性に欠けている。要するに、子どもと真の人間である青年男子との中間段階に位置しているのである。」

ダーウィンの女性論

「知的能力において男女を大きく区別するのは、深い思考力や推理力や想像力を必要とする面においても、あるいはたんに感覚や手を必要とする面においても、あらゆる方面において男性の方が女性よりもはるかに高度な団塊にまで達するということである。」Darwin『人類の起源』

ルソーの女性論

「女子教育はすべて男性中心に考えられるべきである。男性の気に入ること、男性の役に立つこと、男性から愛され敬われること、彼らが幼いうちはこれを教育すること、長じてからは世話を焼き、助言を与え、慰め、その人生を快適にすること---こういったことがいかなる時代にも女性の義務であり、幼児期から教えこまれるべきことである」J.J.Rousseau『エミール』

女性学による パラダイム・シフト

婦人問題論から女性学へ

- ◆ 婦人問題 Women's problem
社会問題論／社会病理学の下位分野
「問題婦人」(標準から逸脱した女性)の研究
Ex. 売春女性の更生、女子労働者の以上分娩
- ◆ 女性学 Women's studies
社会病理から社会の生態学へ
逸脱研究から構造研究へ／図と地の反転
標準的な女性のライフコース＝「主婦」研究へ[岩男・原
1979]
「名前のない問題 unnamed problem」Betty Friedan
「主婦は暗黒大陸だ」上野

ジェンダー研究の発展

- ◆ 女性学からジェンダー研究へ
- ◆ ローカルからユニヴァーサルへ／項から関係へ
- ◆ 女性のいる領域／女性のいない領域 gender-biased
- ◆ 男性学／男性性の研究
- ◆ 「なぜ女性に大芸術家はいないのか？」Linda Nocklin
→ 芸術、文学の再定義

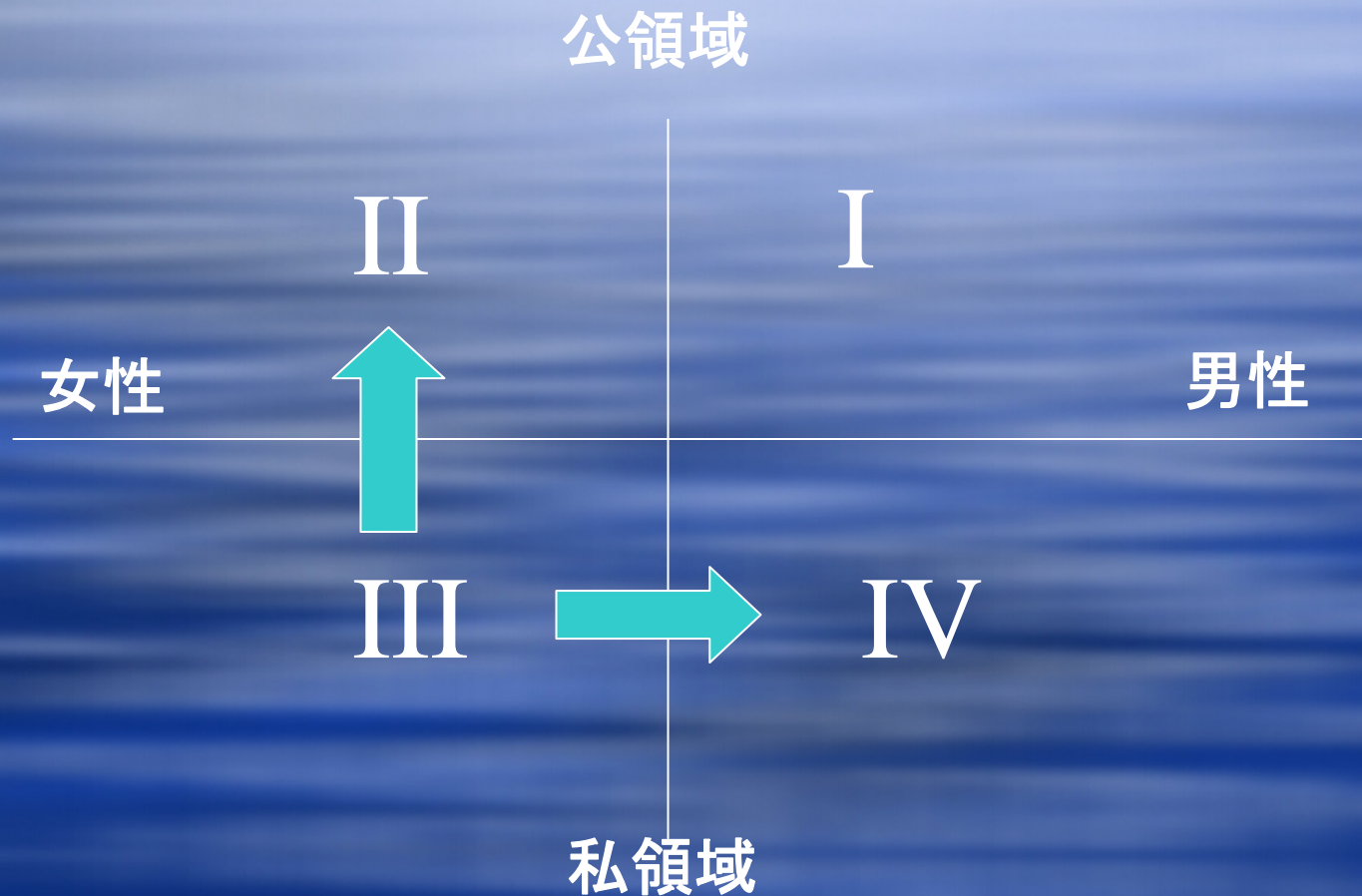
ジェンダー研究の政治性

「私はジェンダーに関する問題は両性関係の歴史ばかりでなく、何であれすべての歴史に対して光を投げかけると主張したいと思うが、そのようなアプローチから生じる結果が必然的に偏ったものになるだろうことも認識している。...このように偏りを自認することは普遍的な説明の追求において敗北したと認めることではない。むしろそれは普遍的な説明はこれまでも可能でなかったし、いまも可能ではないと示唆しているのである。」
[Scott 1988=1992:29]

男性学の成立

- ◆ 「女性学を経過した後の、男性性の反省的探求」
[上野]
- ◆ 人間学から男性学へ
Anthropology→Andrology/ Men's Studies/
masculinity studies
- ◆ 夫・父・恋人としての男
- ◆ 家事・育児する男たち／「半分こ」イズム／主夫
househusband
- ◆ 強姦する男たち／性暴力加害者研究
- ◆ ゲイ・スタディズ

ジェンダー研究の展開



ジェンダーに敏感な gender sensitive 研究へ

- ◆ 学問の書き直し
ジェンダー史／ジェンダー経済学／ジェンダー統計 「不払い労働」
- ◆ 差異の否認から差異の承認へ
性差医療/女性外来/労働のジェンダー化
- ◆ 学問のアジェンダ設定/何が正統な研究主題か？
公的＞私的、マクロ＞ミクロ
→身体・私生活・慣習・感情

ジェンダー中立性gender neutrality のジェンダー化

- ◆ 「一方の性別集団にいちじるしく有利もしくは不利に働く効果」があるか？ [大沢1993]

Cf. 日本型雇用の3つの要素

- ① 終身雇用制
- ② 年功序列賃金給 (家族給family wage)
- ③ 企業内組合

→ 女性の労働市場からの組織的・構造的排除

ジェンダー研究の意義

- ◆ 差異のあるところで差異を相対化し、
 - ◆ 差異がないと思われているところに差異を発見する
- 誰が／何を／何の目的で／誰のために／明らかにしたいのか？ end-user oriented science
認知／評価／設計のための科学[吉田民人]